

Contents *****

特集：オバマ大統領訪日後の日米関係	1p
<今週の”FT Blogs”から>	
”The Sushi summit: Obama in Japan” 「スシ首脳会談：オバマ訪日」	7p
<From the Editor> 次郎物語（長文注意）	8p

特集：オバマ大統領訪日後の日米関係

先週はオバマ大統領の訪日が大きく取り上げられましたが、2泊3日の予定が終わるや否や、報道は急に少なくなりました¹。5月の大型連休の始まりとともに、安倍首相は欧州を歴訪中ですし、「ウクライナ情勢」や「今後のTPP交渉」、さらには「中国の動向」などの次の課題が嫌でも気になります。

それでも日米関係を考える上で、今回の日米首脳会談の意義は大きなものがありました。特に経済におけるTPP交渉、安全保障における日米同盟強化は、それぞれ大きな転機となったように思われます。オバマ大統領の訪日を機に、日米関係はどんな変容を遂げたのか。あらためて整理してみたいと思います。

●総評：「安保食い逃げ論」は妥当か？

ごくごく単純にまとめると、今回のオバマ大統領訪日の成果は以下の3点に絞りができるだろう。

- ① 首脳同士の関係（△：とりあえず関係修復も、ぎこちなさは残る）
- ② 日米同盟強化（○：米大統領が初めて尖閣諸島の防衛を明言）
- ③ TPP交渉（×：大筋合意できず。このままでは漂流の恐れも）

このうち、最もわかりやすいのが①であろう。

¹ 数少ない例外として、筆者が出演した4月28日のテレビ東京『モーニングサテライト』、特集「アジア歴訪後のオバマ外交」をご参照。http://www.tv-tokyo.co.jp/mv/nms/feature/post_65218

日本側は「国賓待遇」を強調し、2泊3日の日程になるべく派手目な行事を入れて、関係緊密化を印象づけようとした。ところがオバマ大統領は、「迎賓館に泊まらず」「ミシェル夫人を帯同せず」「国会演説もなし」など、実務重視で簡素なスタイルを選択した。

実際のところ、共同記者会見での首脳同士の様子を見ていても、どこかギクシャクした感がぬぐえなかった。安倍氏はさまざまな「おもてなし」の技を繰り出したが、オバマ氏はあいかわらずの「孤高の人」ぶりを発揮していた。もっともこれは「いつでもどこでも」の流儀であるし、昨年末以来の歴史問題をめぐる深刻なムードが、とりあえず表に出なくなっただけでも収穫と言えるだろう。

さらに言えば、「銀座のすきやばし次郎」を舞台にした**”Sushi Diplomacy”は大きな成果を収めた**。各国のメディアはこの件で膨大な記事を作成し、結果的に「両国首脳の写真」と「日本の鮨文化に関するストーリー」を全世界にキャリーしてくれた。日本文化を紹介するという意味でも、意義深いものがあった（ほんの一例として、本号では Financial Times 国際面の Gideon Rachman 編集委員による記事の抄訳を巻末で紹介している）。

ややこしいのは、②安保と③経済の兼ね合いである。国内の報道の多くが、**「日本は尖閣防衛で米側から満額回答を得たが、TPPでは譲歩しなかった」**と評した。これをもって、「下手な妥協をしなかった安倍内閣は立派」と考えるか、それとも「日本は安保を食い逃げした、と米側の輿論を買ったのではないか」と後ろめたく感じるかは、やや意見の分かれるところであろう。

筆者自身は、安保と経済は本来、別々に妥当性を論じるべきと考えている。確かに1970年代には、ニクソン大統領と佐藤栄作首相の間で「糸で縄を買う」（日米繊維交渉で譲歩して、沖縄返還を実現する）取引があったと言われている。が、これはいかにも冷戦期特有のロジックであって、日米自動車協議が行われた **90年代半ばから「安保の借りを経済で返す」という発想は薄れている**。今日の日米関係において、「TPPで譲ってもいいから、尖閣防衛で言質を得たい」式の思惑があったとしたら、さすがにそれは少し時代遅れではないかと思うのである。

もっとも、「日本はどうせ米国には逆らえない」という冷戦期のトラウマは、日本側の心理にいつまでも残っていて、それが過剰な対米配慮に至ったり、無用な対米反発につながったりしている。米国への評価も、中国やロシアに対しては実態よりも弱く見え、日本に対しては必要以上に強く見えるという妙なバイアスがかかっている。対米関係は、その手の「下から目線」感覚を払拭すべき時期に来ているのではないだろうか。

以下、TPPと安保のそれぞれについて振り返ってみよう。

●TPP①：交渉の全貌はまだ見えていない

今回の日米首脳会談は、**「政治的基盤が強い安倍首相と弱いオバマ大統領」**という対照的な組み合わせであった。

驚くべきことに、4月から消費税率が上がったにもかかわらず、安倍内閣の支持率は3月とほとんど変わっていない。3月と4月の各社による世論調査を比較すると、共同通信 56.9%→59.8% (+2.9p)、時事通信 48.1%→50.1% (+2.0p)、読売新聞 59%→58% (-1p)、毎日新聞 55%→49% (-6p)、NHK 51%→52% (+1p)、産経新聞 53.5%→54.4% (+0.9p)であった。なぜか毎日新聞だけが下振れしているが、全体としては「4勝2敗」であり、「消費増税がさほど支持率に影響していない」という結果になっている。

逆にオバマ大統領は、ウクライナ問題への対応やオバマケアの不評により、支持率は4割台で低迷している。毎日行われているギャラップ調査においても、シリア問題が浮上した昨年9月以降、支持率が不支持率を上回ったことは1度もない。さらに秋の中間選挙においても、「共和党の上院支配」が現実味を帯びつつある。

ゆえに TPP 交渉において、安倍首相は妥協ができる立場であり、逆にオバマ大統領の政治的自由度は低い状態にあった。TPP で日米合意ができるとしたら、日本側が柔軟性を発揮するからであり、できないとしたら米国側が柔軟になれないからであった。

結果は後者であった。甘利=フロマン両通商代表の長時間にわたる交渉にもかかわらず、日米共同宣言は「TPP に関する日米 2 国間の重要な課題について、前進する道筋を特定した」と述べるにとどまった。すなわち「実質合意」には至らなかった。

ただし、秘密交渉という TPP の性質からいって、日米がどこまで合意しているのかはよく分からない。もしも日米が歩み寄れないのであれば、交渉に参加している他の 10 か国は既に「様子見」モードなので、このまま交渉は漂流することになるだろう。秋の米中間選挙後にすべてが先送りされる、という「越年シナリオ」が濃厚になってくる。が、今月 19~20 日にシンガポールで行われる予定の TPP 閣僚会合において、「交渉継続」にゴーサインが出ることも十分にあり得ると筆者は考えている。

興味深く感じるのは、フロマン通商代表が非常に頑なな態度をとり続けたことにある。4月23日夜の「すきやばし次郎」の非公式会談には、佐々江、ケネディ両国大使に加えて谷内、ライス両 NSC 補佐官が同席した。つまり「安保」を語るメンバーだったが、実際に語られた内容はほとんどが TPP 関連であったと報道されている。だったら、なぜ甘利、フロマン両代表が同席しなかったのか。

おそらくフロマン代表が、「和気あいあいと日本側と食事を共にする」写真を撮られることを避けたのであろう。彼はまた、4月24日夜の宮中晩餐会の前に仕事を終えるわけにもいかなかった。同日昼に発表予定だった共同声明を翌朝に先送りしてまで、甘利大臣との間で「2晩連続の徹夜の交渉」を演じる必要があったのである。

これらはすべて、背後で見張っている議会に向けての「演技」だと考えると分かりやすい。以前から指摘している通り、米側は通商交渉に欠かせない TPA を取得していない。しかしオバマ政権にとり、TPP と TPA は「鶏と卵」の関係にある。TPP を通すためには TPA が必要だが、TPA を通すためには TPP で良い条件を勝ち取ることが不可欠なのだ。「日本からこんないい条件を取りました」と言わないと、議会を満足させられないのである。

そんな風に物事が進んでいるということは、フロマン代表はまったく交渉を諦めてはいないのであろう。おそらくは日本での滞在日程プランを見て、「他人の気も知らないで、呑気な日程を組みやがって…」と内心毒づいていたのではないだろうか。

●TPP②：日豪 EPA が変えた交渉の流れ

とはいえ日本側から見れば、米国側の言い分はかなり「ご無体」なところがあった。

特に自動車関連はひどく、「米国車に対する安全基準の緩和」などは全く呑めない相談である。日本の自動車輸入における最新データを以下にご紹介しよう。

○商品別輸入 自動車（2013 年度）

	台数	金額
全世界	375,812 台 (+ 5.1%)	1 兆 1652 億円 (+24.5%)
米国	22,568 台 (- 4.3%)	850 億円 (+14.3%)
EU	260,817 台 (+23.3%)	9160 億円 (+30.0%)
アジア	55,236 台 (-37.2%)	678 億円 (-20.2%)

昨年度は外車がよく売れて、史上初めて輸入量が 1 兆円の大台を超えた。そのほとんどはベンツやアウディなどの欧州車であって、米国車は前年比マイナスであった（円安のおかげで売り上げは増えた）。ちなみにアジア生産車の逆輸入分は、円安で激減している。

上の数字を見れば、日本の自動車市場に非関税障壁があるとはとても思えない。「日本の消費者は欧州車が好きだが、アメ車に魅力を感じていない」というだけのことである。それでも自動車業界や労組、および関係議員が政権に圧力をかけているのであろう²。

「牛肉や豚肉の関税撤廃」も、かなり強硬な言い分であった。なにしろ自民党は、2012 年の衆院選で「聖域なき関税自由化の交渉には参加しない」ことを公約している。その上で 2013 年の日米首脳会談で、「すべての分野を交渉する」けれども、「両国ともセンシティブ分野があるので」、「一方的に全ての関税を撤廃することをあらかじめ約束することを求められるものではない」ことを確認して TPP 交渉に参加している。成り行きからいっても、「関税ゼロ」という要求は呑めない。だが、関税の引き下げには対応できる（個人的には、豚肉の差額関税制度もなくした方がいいと思う）。

日本側が強気に出られたのは、4 月 7 日に日豪 EPA が合意済みだったことが大きい。日本側の最大の懸念は、米国がブチ切れて「TPP 交渉から日本を締め出そう」と言い出すことであった。しかし日豪間の関税引き下げが先に決まったことで、状況は一変した。他の交渉参加国は、「何も農産物の関税撤廃にこだわらなくてもいいから、日本を TPP 交渉に残し、豪州と同等、もしくはそれ以上の条件を得たい」と考えるだろう。

² 以前、筆者は尊敬する会社の先輩から、「無茶な要求をしてくる客は、かならず誰かに言われているものだと思え」と教わったが、この法則は通商交渉においても当てはまるようである。

つまり豪州が「抜け駆け」してくれたおかげで、その他の国が日本の応援団に回るとい
う、多国間交渉ならではのダイナミックな変化が生じているのである。

米国内のロビイング団体も、似たような立場に置かれている。米国牛は、日本市場にお
いて豪州牛と激しく競争している。仮にこのまま TPP 交渉が停滞すると、確実に日本市場
では米国牛よりも豪州牛が有利になる。ゆえに米国側も一刻も早く TPP 交渉をまとめ、
日本から豪州と同じ、もしくはそれ以上の条件を勝ち取ることが至上命題になる³。

こんな風に、ある国との FTA 締結が他国に対するプレッシャーとなり、全体の交渉を加速
する現象を FTA のドミノ効果と呼ぶ。今まで日本の FTA 交渉は、良く言えば丁寧、悪
く言えば及び腰で、スピード感に欠けていた。ところがここへきてドミノ効果が生じ、一
気に交渉が加速しているのである。

いわば TPP 交渉は、政治の原理が交渉を遅らせている一方で、ビジネスの原理は早期妥
結を求めている。「日米が実質合意に至らなかったから、TPP 交渉は失速した」と決めつ
けるのは早計に過ぎよう。ちなみに今朝時点のニュースによれば、フロマン代表は 5 月 1
日の上院財政委員会において、「日米二国間の市場開放で重要な進展があった」と証言す
るとともに、TPA の成立に向けて議会に協力を求めた由である。

●安保：「尖閣防衛」論と日本のフォロワーシップ

次に、もうひとつのテーマである安保について。

「尖閣諸島の防衛」については、既に米クリントン国務長官とヘーゲル国防長官が言及
済みであった。これを大統領の口から直接言わせたのは、もちろん今回の日米首脳会談の
成果である。さらに日米共同声明は、尖閣諸島を含め「日本の施政下のすべての領域が安
全保障条約第 5 条の適用範囲となる」ことを明記している。

しかしこれに対する 中国側の反論は、外交部報道官という低いレベルによるものであつ
た。おそらくは「想定範囲内」だったのであろう。また米国側は、領有権については従
来通り立場を示さなかったし、オバマ大統領が日中双方の外交努力を促すなど、中国に対
して一定の配慮を見せている。尖閣発言は「米国外交の大きな変化」という程ではないし、
「日本側が借りを作った」というのも穿ち過ぎであろう。

米国側にとって、今回のアジア歴訪には「リバランス政策」への信頼を取り戻すという
目的があった。なにしろ昨年シリア問題、今年のウクライナ情勢では、オバマ大統領の
「弱腰」外交への批判が内外で高まっている。アジア向けメッセージは、中国に脅威を感
じている国を安心させ、なおかつ中国を刺激しないという微妙なバランスが必要だった。

³ 逆に豪州側は、TPP がまとまるのはどのみち 1 年以上先になるだろうから、その前に日本市場のシェ
アを増やそうと考えたのであろう。ゆえに日豪間合意では、牛肉の現行税率 38.5% を 1 年後に 30.5% に下
げることになっている。ところが最終年度の関税率は 19.5% に過ぎず、こちらは「後から TPP でもっと
いい条件をとればよい」と目論んでいる節がある。

米国にとっては、4月28日にフィリピンとの間で新軍事協定を協定したことが、今回の外遊における最重要課題であったはずである。なにしろ22年ぶりに、米軍がフィリピンに戻ってくるという話である。そして中国は、米軍がスービック空軍基地とクラーク海軍基地から去った1992年以降に、南シナ海の領有権を主張し始めたのだから。

思うに今回のアジア歴訪は、日本～韓国～マレーシア～フィリピンと回りながら、真の主演は常にその場にはいない中国であった。オバマ大統領の言動は、多かれ少なかれ中国を意識するものであったし、「尖閣発言」もその一部であったと受け止めるべきであろう。

さらに言えば、フィリピンから見た場合に、「東シナ海で日本を守らない米国が、南シナ海のフィリピンを守ってくれる」とは考えにくい。リバランス政策への信認を高めるためにも、米側には日本に対してリップサービスする必要があったはずである。

日米関係に限って言えば、安倍政権下で行われてきた安保面の努力は、足りないというよりもむしろやり過ぎるくらいであった。本誌の2月21日号「安倍外交と日米関係の現在位置」で詳述した通り、これらの努力は「第1次ナイ・アーミテージ報告書」を基本にしている。同報告書の分類に従って、これまでの成果を箇条書きにしてみよう。

- **政治**：国家安全保障戦略の策定、日本版NSCの設置
- **安全保障**：（南西諸島の防衛を盛り込んだ）新防衛大綱、防衛予算の増額＋集団的自衛権の解釈変更（間近？）＋自衛隊法などの改正（秋の臨時国会？）＋日米防衛ガイドラインの見直し（年末まで）
- **沖縄**：普天間基地移転の進展（沖縄県が辺野古埋め立て申請を承認）
- **諜報協力**：特定秘密保護法案が成立
- **経済**：武器輸出三原則に代わる防衛装備移転三原則

長年の課題が一気に進展し、同盟国としてのフォローシップを発揮しているわけである。さすがに米国側としても、これを評価しないわけにはいかないだろう。

さて、5月は以下の通り、数多くの外交日程が立て込んでいる。オバマのアジア歴訪の後には、中国外交が動き出す番だと思うのだが…。

<当面の外交日程>

- | | |
|-----------|-------------------------------|
| 5月4~6日 | 日中友好議員連盟（高村正彦会長）が訪中 |
| 5月6~7日 | OECD閣僚理事会（パリ）～安倍首相が出席 |
| 5月7~9日 | 自民党議員連盟（野田毅会長）が訪中 |
| 5月12~15日 | TPP主席交渉官会合（ホーチミン） |
| 5月16日 | インド総選挙開票 |
| 5月17~18日 | TPP閣僚会合（シンガポール） |
| 5月22~25日 | 欧州議会選挙 |
| 5月25日 | ウクライナ大統領選挙 |
| 5月26~27日 | エジプト大統領選挙 |
| 5月30~6月1日 | シャングリラ会議（シンガポール）～安倍首相が出席、基調講演 |

<今週の”FT Blogs”から>

”The Sushi summit: Obama in Japan”

「スシ首脳会談：オバマ訪日」

The World

April 23rd 2014

*この記事を書いた **Gideon Rachman** 記者は、普段は中国寄りの論説を書くことが多いんですけど、日本のこともよく知っているんですね。いやはや、畏れ入りました。

<抄訳>

もしも歴代米大統領に「日本で贅沢したで賞」があったとしたら、オバマ大統領はブッシュ前大統領を大差で破ることができる。日米の指導者は水曜夜、日本で、そしてたぶん世界でもっとも高価な鮨屋で夕食を共にした。「すきやばし次郎」はカウンター10席程度の店であるが、メニューは300ドルからの豪華なおまかせコースがあるのみである。

完璧を追い、細部にこだわる技量は、本紙既報の通り。お客は店主・小野二郎氏のルールに従わねばならない。20皿が終わるまで論評は避け、香水などはご法度である。

2002年のブッシュは、もっと安くて広々とした居酒屋スタイルの「権八」に招かれた。こちらはタランティーノ監督の『キル・ビル』に登場した。どちらのチョイスも、外国の賓客をいかにもてなすかという日本側の思いが反映されている。料亭はときに堅苦しいが、これらの店は「日本的」であると同時に、外国人にとって敷居の低いものだ。

権八は多くのメニューがあり、キル・ビル2部作のセットとして有名であり、日本のロックスター布袋寅泰を知らしめた。ただし警備体制はさぞかし大変だったことだろう。

これに対し次郎は、ミシュランで7年連続3つ星を獲得しており、米国ドキュメンタリー映画『二郎は鮨の夢を見る』で太平洋を越え、千載に名を残すことになった。

小野二郎氏の来歴は、アメリカ的なサクセスストーリーである。88歳の二郎氏は9歳の時に両親が破産し、これからは自分で生きて行くと告げられ、鮨屋での修行が始まった。

完璧を追求するが、儲けは目指さない。客の数とほぼ同数の職人を抱え、最高の食材のみを使う二郎氏の目的は、鮨への愛と技量であって、利益や利幅ではない。

10年前のブッシュに比べれば、オバマ訪日の方が重責と言える。島をめぐる日中間の対立と、環太平洋の貿易協定を何とかせねばという2つのテーマがある。二郎氏のカウンターから見えてくるのは、おそらくは後者に対するヒントである。

二郎氏の物語は忍耐そのものである。店をここまでにする努力、夢のような鮨を生むに至った彼と家族の犠牲。そして客が予約に要する時間（ときには1年待ちも！）。

目指すものが愛だろうが、必要性だろうが政治だろうが、TPP交渉は日米双方にとって苦しいプロセスである。両国は市場アクセスや農業などの主要問題で譲歩を拒んでいる。双方の通商代表は過去2週間で40時間を費やしたが、どの程度前進したのか分からない。

二郎氏が映画とミシュランによって得た名声を、無粋なことだと思ふ日本人もいる。ある知人は、「皆が知るようになったら仕舞いだね」と言った。また別の知人はこうも言っている。「小さな鮨屋が、日本にでっかい成果をもたらしてくれればいいのだが」

<From the Editor> 次郎物語（長文注意）

「わざわざ来てもらったのはほかではありません」

執務室の安倍晋三首相はおごそかに切り出した。

「ホワイトハウスからの返事がないのです。4月23日、いったい何時になったらオバマ大統領は日本に到着されるのか。政府専用機ですから、時間はいつでも自由に都合できるはず。羽田空港は万全の準備をしているし、官邸では晩飯の予定を空けてお待ちしています。大使閣下、ぜひともお返事をいただきたい」

キャロライン・ケネディ駐日全権特命大使は、笑顔を浮かべつつ応じた。

「総理、まことに残念な事態だと存じます。オバマ大統領には、ときどきそういうことがあります。とても孤独な上に、食も細いのです。家族がいなくの大統領は、ホワイトハウスでも一人でDVDを見ながらドギーバッグの中華料理を食べていたりします。今頃はきっと、『ああ、どうしようかなあ・・・』と迷っているのではないのでしょうか」

「それでは困ります」

安倍首相の声がキリリと厳しくなった。

「これは国と国との出来事です。わが国は二泊三日の国賓待遇で大統領をお招きしている。パーソナルな時間もいただかないと、日米間の機微にわたる話ではできないではありませんか」

「おそれながら申し上げます・・・」

同席していた世耕内閣官房副長官が横から口を出した。

「写真を撮ることも非常に重要です。首脳同士がにこやかに懇談している写真が全世界に流れること、これも首脳会談には欠かせないアイテムです。ぜひとも4月23日夜は、オバマ大統領と安倍首相の私的な懇談が必要なんです」

「それならば、こういうアイデアはどうでしょう」

ケネディ大使が言った。

「先日、オバマ大統領はDVDで"Jiro Dreams of SUSHI"というドキュメンタリー映画を見て、大変感銘を受けたそうです。その鮨屋で大統領をお招きするとしてはいかがでしょう。きっと二つ返事で乗ってくると思いますわ」

「おお、それは銀座の『すきやばし次郎』のことだな。面白い。すぐに予約を入れよう。いや、私が自分で電話をする。ほかのお客には申し訳ないが、当日は貸切りとさせてもらわねばな」

安倍首相はいそいそと携帯電話を取り出した。隣に立っている世耕副長官も興奮気味であった。

「すばらしい！大賛成です。銀座の鮨屋でアメリカ大統領と日本国首相が会談。これはすばらしい『絵』になりますよ。カウンターで両首脳が並んで座り、その間に伝説の"SUSHI Master"が立つ。こんな写真が撮れたら、全世界のプレスがキャリーすること間違いなしだ。日本の鮨文化のPRにもなるし。いや、すごいアイデアがあったものだ！」

* * *

言うまでもなく、オバマ大統領は飛びついた。そして4月23日夜、いそいそと銀座にやってきた。「すきやばし次郎」のディナーは大成功を収めた。翌日のCNNは、「**オバマのアジア歴訪は“人生で最高の鮨”で始まる**」と報じたものである⁴。

それどころか、味をしめたオバマ大統領は方々で「次郎」の鮨のうまさを吹聴するものだから、西側各国首脳の間でも「われわれも食べてみたいものだ」との声が上がるようになった。

「世耕さん、すぐに手配をしましょう。6月のG7サミットでは、小野二郎さんに一緒にブラッセルに行ってもらいます。欧州やカナダの首脳にも、絶品の鮨を食べてもらうのです」

「ええっ、総理、小野さんは88歳ですよ。大丈夫ですかねえ」

「大丈夫、きっと来てもらえますよ。だって日本の鮨文化の未来が懸っているのですから」。

もちろん、伝説のSUSHI Masterの返事はイエスであった。ブラッセルのG7サミットで供せられた「すきやばし次郎」の味に、各国首脳は言葉を失うほどであった。

* * *

ただし、この成り行きを喜んでいない者が一人だけ居た。モスクワのプーチン大統領である。「しまった！ソチG8を袖にされて、ロシアが仲間外れにされたことが悔しいわけではないが、俺だけが究極の鮨を食いつぶされたとは面白くない。おいっ、今から日本に飛ぶぞ。お忍びでそのジローという店に行く。大使館に準備をさせろ。いいか、今すぐにだぞ！」

慌てたのは狸穴のロシア大使館である。ドタバタ準備をしている間に、早くもプーチン大統領がやってきた。さすが元KGBだけあって神出鬼没、変装もバッチリ決まっている。

「おいっ、今すぐ行くぞ。ジローへ」

大統領を乗せたクルマは、なぜか銀座ではなく三田へ向かった。

「大統領閣下。ジローは行列ができる人気店ですが、すでにわれわれの手の者が順番を待っています。今頃はちょうどいいタイミングでしょう」

黄色い看板が見えてきた。ほのかに漂うのは、どう考えても酢飯の香りではなく、もっと濃厚な匂いである。が、プーチン大統領は気もそぞろでカウンター席に腰を下ろした。カウンター内のオヤジさんは、プーチンに向かって無愛想にこう尋ねた。

「ニンニク、入れますか？」

* * *

もはやお分かりであろう。ロシア大使館は、こともあろうに「すきやばし次郎」と「ラーメン二郎」を間違えたのである。ところが世の中はわからない。プーチン大統領は、濃厚なブタのエキスが入ったラーメンに魅せられてしまったのである。

「うむっ、鮨もいいけれども、あんなものは全然食べた気がしない。われわれ新興国経済は、もっとガッツリとしたものを食わなきゃいかん。身体も温まるし、同じジローでもこっちの方がずっとロシアにはふさわしい」

⁴ <http://edition.cnn.com/2014/04/23/travel/obama-tokyo-sushi-restaurant/> ←お薦めです！

プーチン大統領は、やおら二郎のオヤジさんに向かってこう言った。

「折り入って頼みがある。オヤジさん、7月の予定はあいているか。よかったら一緒に、ブラジルまで行ってほしい」

「ええっ？ブラジルですかあ。遠いなあ。まっ、ワールドカップの決勝戦を、特等席で見せてくれるというんなら、考えないでもないですがねっ」

冗談のつもりだったかもしれないが、ロシア大統領の言葉に二言があろうはずがない。

「決勝戦だけではなく、トーナメント全試合とザックジャパンの全予選を予約してやろう。決まったな。いざ、ブラジルへ！」

* * *

ワールドカップが終了した直後、ブラジルのフォルタレザでは「第6回 BRICS サミット」が行われ、中国、インド、ロシア、南ア、ブラジルの首脳が顔を揃えた。ここで料理の腕を振ったのは、もちろんラーメン二郎のオヤジさんである。

「すばらしい。身体の奥から力が湧いてくるようだ」

「先進国のお上品な奴らには、このこってりした味の良さはわかるまい」

「オヤジさん、二杯目はやさいマシマシ、カラメ、ニンニク入りで！」

一同が二郎のラーメンに中毒したところで、誰ともなく言い始めた。

「こうなったら鮭とラーメンで先進国と勝負をしてみたいものだ」

「面白い。先進国の次郎と新興国の二郎、どっちが美味いか」

「わかりました」

習近平国家主席が宣言した。

「私が責任を持って、11月のAPEC首脳会議でジロー決戦を主催します。北京で美味しいもの大会をやりましょう！」

「そうだ。ついでにウクライナの連中も呼んでやれ」

「そうそう。イランとシリアとイスラエルも呼びましょう」

かくして秋には、世界中の難問を抱えた首脳が北京に集まることになったのであった。日本のソフトパワーは、世界に美味と平和をもたらしたのである。

* * *

注：上記はすべてフィクションであり、実在の人物・組織との類似は偶然の産物であります。

* 次号は5月16日（金）にお届けする予定です。

編集者敬白

本レポートの内容は担当者個人の見解に基づいており、双日株式会社および株式会社双日総合研究所の見解を示すものではありません。ご要望、問い合わせ等は下記までお願いします。

〒100-8691 東京都千代田区内幸町 2-1-1 飯野ビル <http://www.sojitz-soken.com/>

双日総合研究所 吉崎達彦 TEL:(03)6871-2195 FAX:(03)6871-4945

E-MAIL: yoshizaki.tatsuhiko@sojitz.com